

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 投野 由紀夫

学位申請者 Wong, Michelle（ウオン・ミッシェル）

論文名 The Linguistic Expression of Affect in L2 Oral Emotion Narratives of Japanese Learners of English

【審査結果】

審査委員会は投野由紀夫教授を主査とし、主任指導教員の吉富朝子教授、副指導教員の大津友美教授、および外部委員の谷口龍子元本学教員と立教大学森聡美教授の5名で構成された。上記論文の公開審査ならびに最終試験は2025年7月26日に行われ、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのに相応しいとの結論に達した。

【論文概要】

この研究は、日本語を母語とする英語学習者による第二言語（L2）の口頭による感情ナラティブの特徴を明らかにすることを目的とした。

第1章では、本研究の意義目的および研究設問が述べられている。個人的な経験を共有し感情を表現することは、日常的なコミュニケーションにおいて不可欠な要素であり、コミュニケーション能力の重要な側面の一つでもある。Labov and Waletzky（1967）は、個人ナラティブの構成要素として、「指示的機能」（referential function）と「評価的機能」（evaluative function）の二つを提唱した。指示的機能はナラティブの事実に即した内容に関わるものであり、評価的機能は語り手の感情、視点、および出来事の解釈を示すものである。評価はナラティブにおいて中心的な要素であり、ナラティブの重要性を伝える役割を果たす。明確な評価が欠ける場合、ナラティブは無意味なものとして認識される可能性がある。

L2で一貫性のある魅力的なナラティブを語ることは、言語的、概念的、およびコミュニケーション的スキルの組み合わせを必要とするため、非常に難しい。さらに、文化的な違いを理解する能力も求められる。ナラティブがL2での慣習化されたスタイルには適合しない場合、否定的な評価を受ける可能性があり、誤解を引き起こすこともある。ナラティブは日常的なコミュニケーションにおい

て重要であり、感情表現と密接に関連しているにもかかわらず、L2 教育の現場では、ナラティブ・スキルや情動的な言語表現の学習が十分に重視されることは少ない。また、児童のナラティブ発達に関する研究は多く行われているが、成人 L2 学習者の感情ナラティブに関する研究は依然として限られており、特に日本語を第一言語（L1）とする英語学習者を対象とした研究は少ない。

そこで、本研究は以下の研究設問（RQ）を立てた。

RQ1: 日本語を L1 とする英語学習者と英語 L1 話者の口頭感情ナラティブにはどのような違いがあるか。

RQ2: 英語の熟達度は英語学習者の口頭感情ナラティブにどのような影響を及ぼすか。

RQ3: 海外経験は英語学習者の口頭感情ナラティブにどのような影響を及ぼすか。

RQ4: 異なる感情テーマは英語学習者の口頭感情ナラティブにどのような影響を及ぼすか。

RQ5: 海外経験と英語の熟達度が類似した英語学習者の口頭感情ナラティブにはどのような違いがあるか。

第 2 章では先行研究を概観している。Labov のナラティブの枠組みに焦点を置いて、評価及び情動を表現するデバイス（evaluation and affective devices）の概念を紹介し、ナラティブ・スタイルの文化間の違いについてまとめた。さらに、L2 での口頭ナラティブの産出の複雑さや、コミュニケーション能力における重要性を指摘した後、L2 ナラティブにおける評価機能を検証した先行研究を概観し、ナラティブ・スタイルや情動的表現を左右する要因について考察した。本研究ではさまざまな要因のうち、以下の 5 要因に着目した：(1)文化差（日英語間のナラティブの特徴の違い）、(2)L2 熟達度（とりわけ語彙密度・文法の柔軟な使用・談話の一貫性）、(3)言語学習環境（海外滞在経験の有無）、(4)ナラティブを引き出すタスク（トピック・感情テーマ）、(5)話者の性格の違いによる話し方や感情表現の個人差。

第 3 章では方法論が述べられている。本研究ではグループの特徴を比較する量的分析と、個々のナラティブを比較する質的分析の両方を取り入れた。まず、28 名の日本語を L1 とする英語学習者と 8 名の英語 L1 話者の感情ナラティブを比較した。次に、より小規模なサブグループを比較し、熟達度、海外経験、感情テーマという 3 つの要因がナラティブに与える影響を調査した。最後に、2 名の英語学習者をケーススタディとして分析し、個人差について検討した。

ナラティブ・タスクとして、参加者は「怒り」「恐怖」「悲しみ」「喜び」「驚き」の 5 つの感情テーマに基づき、個人的な経験を L2 英語と L1 日本語で語る

よう求められた。

収集されたナラティブは以下の 4 つの側面から分析された。(1)ナラティブの種類：ストーリー (story)か、説明 (account)か。ストーリーの場合、完結 (complete)しているか未解決 (unresolved)か。説明の場合、時系列型 (chronological)か、反応型 (reaction)か、全般的 (general)か。(2)長さ：ナラティブはいくつの節 (clause count)から成っているか。(3)内容：節の内容は行動 (action)・状況説明 (orientation)・評価 (evaluation)のいずれか。(4)情動的表現の種類：感情表現 (emotion expressions)・評価語 (evaluative words)・強調表現 (intensifiers)・直接話法 (reported speech)・感嘆詞 (interjections)・強調アクセント (stress)・繰り返し (repetition)・談話標識 (discourse markers)・直接の呼びかけ (direct address)のいずれをどの程度どのように使っているか。

統計分析は RQ1 (話者グループ) および RQ2 (熟達度) に対して実施されたが、RQ3 (海外経験)、RQ4 (感情テーマ) および RQ5 (個人差) はサンプルサイズの制約により統計的仮説検定は行われなかった。

第 4 章では分析結果を、第 5 章では結果を受けた考察を述べている。英語学習者と英語 L1 話者の比較 (RQ1) の結果、英語 L1 話者は英語学習者よりも頻繁にストーリー型ナラティブを使用し、より多くの展開や評価的内容を含んでいた。また、情動的表現の使用については、英語学習者は主に感情表現に頼る傾向がある一方で、英語 L1 話者は直接話法、感嘆詞、強調、談話標識、直接の呼びかけなど、より多様な情動的表現を用いることが明らかになった。この結果は、学習者が直接的な情動的表現を好む傾向があると示した先行研究と一致している。さらに、両グループともにさまざまなナラティブの種類を使用した。最も多かったのは「未解決型ナラティブ」であった。この結果は、感情ナラティブにおいては従来の完結型ナラティブよりも未解決型ナラティブが一般的である可能性を示唆する。

英語学習者グループ内の熟達度についての比較 (RQ2) では、熟達度が高まるにつれて、学習者はより詳細で評価を伴うストーリー型ナラティブを使用する傾向があった。高熟達度の英語学習者は、直接話法、感嘆詞、強調、談話標識、直接の呼びかけなど、より多様な情動的表現を使用した。しかしながら、最も熟達した英語学習者であっても、英語 L1 話者と比較すると感情表現の範囲が限られ、基本的な感情語の繰り返しの依存する傾向が見られた。この結果は、英語学習者がこれらのスキルを向上させるためには、より具体的な教育的支援が必要であることを示唆している。

海外経験の影響についての分析 (RQ3) では、まず同じ熟達度の英語学習者の

中で、海外経験のある学習者と海外経験のない学習者を比較した。その結果、海外経験のある学習者は、より長いナラティブを語る傾向が見られたが、それ以外に大きな差は確認されなかった。また、海外経験のある学習者を除外し、熟達度に関連する分析を改めて行ったところ、RQ2の結果とほぼ同じパターンが見られた。これらは、熟達度の影響が海外経験によるものではなく、独立した要因である可能性を示唆している。ただし、海外経験の影響については、対象者が少ないため明確な結論を下すのは難しい。

感情テーマのナラティブへの影響（RQ4）については、感情テーマによって英語学習者と英語 L1 話者の間にある程度の類似したパターンが見られた。例えば、「恐怖」のナラティブは行動中心で完結型ナラティブをとることが多く、「怒り」のナラティブは長く、評価を多く含み、情動的表現が豊富であった。一方、「喜び」のナラティブは、出来事よりも経験そのものに焦点を当てた記述的なアカウント型ナラティブが多かった。「悲しみ」と「驚き」は特に明確なパターンは見られなかった。これらの結果は、特定の感情ナラティブには話者グループを超えて予測可能なパターンが存在する可能性を示唆している。

最後に、ケーススタディとして選ばれた 2 名の英語学習者（RQ5）について、量的・質的分析を行ったところ、類似した背景を持ちながらも、異なるナラティブおよび情動的表現の L2 スタイルを示した。また、彼らの日本語と英語のナラティブを比較したところ、全体的な構造や内容は類似していたが、トーンや感情表現には微妙な違いが認められた。これらの結果は、文化的背景、熟達度や海外経験だけでなく、個人差が L2 ナラティブと情動的表現に影響を与える可能性を示している。

第 5 章では、それぞれの研究設問に対する結果の考察に加えて、L2 教育において個人的ナラティブに感情表現を導入するための二段階の教授法を提案している。指導では特に意識を高める活動 (awareness-raising) と統制された練習 (controlled practice) をしたのち、個人化 (personalization) と精緻化 (refinement) のための活動を行うことを提唱している。また、本研究の限界として、以下の点を挙げている。まず参加者の抽出法およびサンプルサイズの制約があり、特に RQ3～RQ5 については対象グループの規模が小さいため、結果を一般化することは難しい。加えて、ナラティブ・スタイルや情動的表現に影響を与える要因は多岐にわたり、それらの相互作用をより詳細に検討する必要がある。今後の研究では、より大規模で統制されたデータを用いて、文化的背景、熟達度、海外経験、感情テーマ、個人差がナラティブにどう影響を与えるかを探ることが考えられる。

第 6 章の結論では、本研究が L2 英語における口頭の感情ナラティブの特徴や

感情表現の使用に対する理解に貢献し、ナラティブ・スキルがコミュニケーション能力において重要であることをあらためて強調している。また、本研究の知見が L2 教育における感情表現の指導やナラティブ・スキルの向上に寄与するとしている。

【講評】

本論文は以下の点において非常に優れているとの評価がなされた。

- ① 外国語としての英語の口頭ナラティブの研究で、日本語を L1 とし、大人の話者を対象に、感情ナラティブに焦点を当て、効果的なナラティブにつながる評価的機能を検証した研究は非常に限られているため、先駆的な研究として希少価値がある。
- ② 先行研究の概観をはじめ、論文全体の内容が非常に体系立てて整理されているため、読みやすく、結果部分も日本語を L1 とする英語話者のナラティブの特徴が明確に示されていて意義深い。
- ③ 今後さまざまな展開の余地のある研究内容である。第二言語習得研究としては、ナラティブ分析を通して、談話レベルのコミュニケーション能力の発達段階がある可能性を示しており、L2 コミュニケーション能力育成に向けた英語教育における指導や教材開発のあり方についての手がりも提示している。言語評価研究の観点からは、ナラティブの発達段階の言語的特性を基に、社会言語学的・語用論的な能力記述につながる潜在的な情報が提供されており、談話分析・会話分析研究としての探求や、ナラティブ・スタイルの対照言語学的研究にも発展しうる実証データが示されていて興味深い。

一方で、以下のような指摘と質疑がなされた。

- ① 英語学習者データの比較対象が英語 L1 話者データであるが、ナラティブのあり方や指導を考える上で、母語話者を規範とする考え方でいいのか。
- ② 海外滞在経験の有無のみで英語学習者グループを分けているが、滞在期間や滞在中の経験の違いを十分に考慮していない。話者の他言語の能力や知識と併せて、ナラティブ・スタイルに影響を及ぼすとは考えられないか。
- ③ 日英語におけるナラティブの対照分析をより厳密に行い、例えば話者が用いる構文の違いなども明らかにできなかったか。
- ④ 量的分析の補足情報や実例の提示として質的分析が位置付けられており、談話分析あるいは会話分析の形をとった本格的な質的分析は行われていない。
- ⑤ 実証データを踏まえた英語指導法について提案がなされてはいるが、

awareness-raising のモデルとなる教材はどのように開発すればいいのか。検証結果を踏まえたモデルを作成する手順を具体的には示していないため、教育現場で実践に直接結びつけられるための検討がもっと必要である。

- ⑥ ナラティブ・データの文字化・アノテーション・分析は体系的になされていて評価できるが、統計データから読み取れる解釈の記述が不十分な点があり、すべての統計データに対する議論が尽くされているとは言えない。また、さまざまなコーディングを行ってはいるが、どのような言語的特性が最も重要な観点なのか、総合的な見解がわかるとなお良かった。

これらの指摘や質疑に対して、ウォン氏からは以下のような回答があった。

・英語 L1 話者のナラティブはひとつのありうる目標ではあるものの、母語話者規範を非母語話者が採用しなくてはならないとは思っていない。

・他の言語能力の影響や、海外滞在期間中の経験は確かにナラティブ・スタイルに影響を及ぼす可能性があるとは認識しているが、今回は詳細までは追求できなかった。

・日英語のナラティブの対照言語学的研究や、ナラティブ能力向上のための指導法については、今後の課題だと理解している。特に英語教育学への実践的応用については追究していこうと考えている。またナラティブの振り返りデータもナラティブ分析において有効であるため、やりとりを通した対話的ナラティブ (interactive narrative) の調査と併せて、将来の研究の対象としたい。

審査委員から出された指摘や質疑は、いずれも今後の研究の発展を期待しての提言であり、本論文が L2 による感情ナラティブ分析として希少価値のある先駆的研究であり、今後の研究への広がりのある示唆に富んだ内容であることを否定するものではなかった。いずれの指摘や質疑に対してもウォン氏は誠意ある回答をし、自らの研究の課題についても十分に自覚していた。また今後の研究に向けた展望についても、具体的な構想を述べることができた。

【総合評価】

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は日本語を L1 とする L2 英語話者による感情ナラティブの特徴を実証し、その英語教育学への応用の可能性を示した、学術的意義および教育実践的意義の高い実証研究であると評価され、学位申請者が研究者としての資質を十分に有していると判断された。よって審査委員会は全員一致で、学位申請者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。